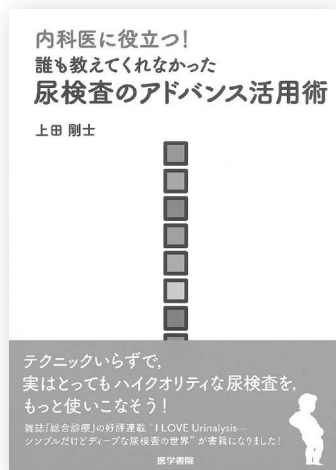




内科医に役立つ！ 誰も教えてくれなかった 尿検査の アドバンス活用術

上田剛士＝著

定価：本体 3,500 円＋税
B5・176 頁／医学書院／2019
[ISBN978-4-260-03954-3]

救急医や研修医が尿検査を学ぶバイブル

評者 清田雅智 飯塚病院総合診療科

今日、ほとんどの大病院では中央検査室が標準的に整備され、医師自ら検体検査を行うことはほぼ皆無になっている。検体検査のなかでは「採血」を行うことが主流で、多くの疾患は血液検査から分析され診断されていくことが多い。「検尿」という地味な検査は、腎臓内科医や泌尿器科医を除くとこだわりをもってオーダーすることは少ないのではないかと。しかし採血と異なり、尿検査の侵襲は少ないメリットがあり、深く診ていくと意外な気づきもあり、今日でも有用な武器であることには違いない。

内科医として日常臨床でよく使用するのは、「第9章 尿路感染の起因菌は何か？」における尿中白血球と亜硝酸塩、pHの判断であろう。腎臓の大家 Burton D. Rose も他書にて尿の pH の尿路感染での重要性を指摘しているが、きちんとした解釈がここに書かれている。また、「第17章 低ナトリウム血症をみたら尿をみる」というのは確かにそのとおりで、ナトリウムに加えて尿酸を解釈することが重要であり、これを血液検査だけで診断するというのはありえない話だろう。低ナトリウムの解釈は、学生時代にはあまり教わらず研修医になり臨床現場で学ぶものの1つであり、ここに書かれている内容を読めば、マニュアルの背景がわかることだろう。同様に「第18章 低カリウム血症をみたら尿をみる」も重要で、低カリウム血症の解釈では尿中 K の排泄を評価するために、K/Cr、TTKG、FEK などの難解な解釈を Halperin の文献も用いて明確に論じている。

ディープだけどマニアックではない尿検査の世界

評者は、本誌『総合診療』の連載は極力目を通すように意識しているので、著者の上田剛士先生の連載「I LOVE Urinalysis」は毎月リアルタイムで読んでいた。毎回きちんと文献的にも裏打ちされた内容で、知らなかった内容も複数あり、連載サブタイトルとおり「シンプルだけどディープな尿検査の世界」が本当によく表現されていた。今回、これが単行本になったことは大変ありがたいことである。

尿の試験紙の特性を活かして、尿以外の検体に応用することは、若干マニアックで、実際には使わないような話に見えるかもしれない。昔、研修医の頃に夜間の救急外来にて吐血疑いで運ばれてきた患者さんがいた。消化器内科に緊急内視鏡を依頼すべきかどうかは、当時はハードルが高かった。患者さんの吐物が本当に出血であると言ってよいのかと悩んだ時、同僚が尿試験紙で確認をして出血だと診断していたことを思い出す。個人的には、尿の検体用の検査を他の検体に対して行って本当によいのかという疑問をもっていたが、第19～25章は、こういった疑問にきちんと根拠に当たり、どこまで検証されているかを述べている。これを読むと、「尿」という枠組みではなく、その「検査特性」を理解することの重要性が理解される。

本書は、救急の医師や研修医が尿の検査について勉強するバイブル、と言っていてよいと私は思っている。

